環境科学年報―信州大学―　第14巻，1992
〔Ann. Environ. Sci., Shinshu Univ.〕

ヨーロッパアルプスの自然公園

土　田　勝　義
信州大学教養部

The National Parks in the European Alps

Katsuyoshi TSUCHIDA
Faculty of Liberal Arts, Shinshu University

はじめに

筆者は1991年９月、日本自然保護協会が主催するヨーロッパアルプスエコツアーに参加し、当地の自然公園、自然保護地域、観光地域を見聞する機会を得た。その折り現地での取材、調査また資料などから、ヨーロッパアルプスの自然公園の実態と問題点、また我国の山岳地域の自然公園や自然保護のあり方などを考えてみたい。

対象地域は、ヨーロッパアルプスにあるスイス国立公園、オーストリアのホーエ・タウエルン国立公園、およびヨーロッパアルプスには属さず、ドイツのチェコ国境の山地にあるバイエリッシャー・ワルト国立公園と、各地の自然観光地等である（図１）。

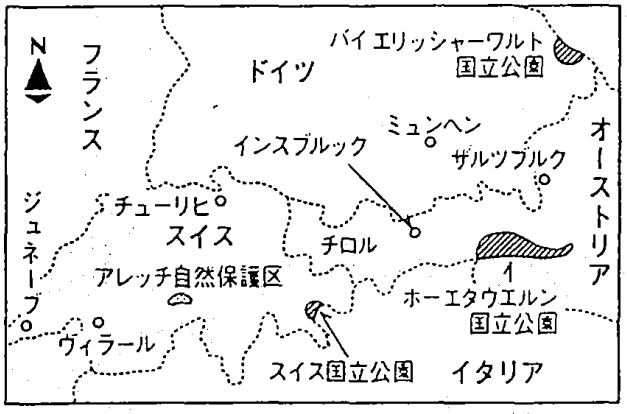

図１．ヨーロッパアルプスの自然公園の位置。

自然公園の形態

ヨーロッパの自然公園は、基本的に国立公園の形態をとる。したがって自然公園は国立公園そのものである。国立公園の形態は、その国の自然、歴史、社会的条件に応じてさまざまである。自然保護の先進国といわれるヨーロッパでも、アメリカの国立公園制度が発足した1886年より遅れて、1909年に初めてスエーデンに国立公園設けられた。またその管理形態も、自然保護の立場からすれば望ましいとされる営造物制のものは少なく、地域制のものが大部分である。面積的にも北欧地域を除いてかなり小さい。なおアメリカの国立公園制度は、基本的に自然保護地域そのものである（近年さまざまな形態のものが出来たが）。

中部ヨーロッパの山岳地域を代表するアルプス地方は、類まれな景観を有しており、西はフランス南部から東はオーストリアまで約800km、南北約80kmにわたり、3000m以上の高峰が多数連なっている。この大自然に対して、それぞれの国では特定地域を国立公園や自然保護地域に指定して保護をはかっている。

スイスでは、国立公園はスイス国立公園ただ１ケ所で、全地域が基本的に厳正保護区となっている営造物制の国立公園である。このほか数ケ所に自然保護地域（規模が小さいが厳正保護地域）がある。オーストリアも国立公園はホーエ・タウエルン国立公園１ケ所であるが、ここはさまざまな土地所有、保護利用法をもつ地域制の国立公園である。ドイツのバイエリシャー・ワルト国立公園も地域制の国立公園である。

日本も全ての自然公園は地域制となっている。地域制国立公園とは、優れた自然・景観地域を広く自然公園とするために、土地所有に関係なく地域を設定するものである。営造物制とは基本的に公有地に設定するものである。前者は広い範囲にわたって自然公園が設定できるが、公園の管理は複雑となるし、その中では人間の生産活動や、観光が日常的に行なわれている。後者は広大な国土と未開発地域を持つような国では、ある程度の面積が確保できるが、狭い国土を持つ開発が進んだ国では困難である。ここでは管理が容易であり、とくに自然保護優先の自然公園とすることができ

る。中部ヨーロッパのような古い歴史と開発が進んだ地域では、地域制の自然公園とならざるをえない面がある。そんな中で、スイス国立公園は特異な存在であろう。

各地の自然公園のあらまし

1．スイス国立公園

概要：スイス国立公園は、スイスアルプスの東部にあり、有名なリゾート地サンモリッツの北部にあって、その中心地はツエルネッツという町である。ここにはビジターセンター（兼管理事務所）がある。中部ヨーロッパの国立公園ではもっとも早く、1914年に設けられたスイス唯一の国立公園である。

生い立ちの歴史は、1900年代の初めに、スイスが産業や観光で開発が進み、自然が変容していく中で、当時、スイス自然研究協会の中の自然保護の必要性に関心を持つ人々によって自然保護委員会ができ、このメンバーの活動によって、自然保護区の創設運動がなされた。1908年にエンガデン地方のツェルネッツ行政区が、クルオッツァの谷を地主から借り受けて提供することになったが、賃貸料が不足していた。そこでその支援のためにスイス自然保護協会が設立された。さらに協会はもっと広域の国立公園とすること、国にさらなる援助や制度化を要請し、1914年にスイス連邦法によってこの地域に国立公園が制定されたのである。その後地域は拡張を続け、現在は168.7㎢に広がっている。

全域借用地であり、借地料は国が支払い、公園維持費はスイス自然保護協会が負担するというシステムである。公園制定の目的は、自然の厳正な保護と利用規制にある。スイス国立公園は、「動植物を自然のままにまかせ、公園を全ての影響から護り、科学研究のためにのみ利用する」という目的を持っている。このように厳しい保護がはかられている理由は、当地の昔からの自然破壊の歴史によるものである。

当地は、紀元前から人が住んでいたり、往来があった。11－17世紀には当地の鉱山の開発があった。森林は坑木や燃料として伐採された。その後大量の材木がイン河などの河川を使って各地に運搬された。その結果、18世紀末までに当地の森林はほとんど丸裸になってしまったのである。本来、優れた自然地域をようするアルプスの荒廃に目覚めた人々は、何とかして本来の自然を取り戻し、それを保護する地域を確保したいということで、アメリカの国立公園公園のように、基本的に自然保護地域としてスイス国立公園の性格づけを考えたのである。

現在の自然の様子をみると、当地の最高峰はピッツ・ピソック山（3174m）で、いくつかの谷からなる。高山帯は2300m以上、亜高山帯は1400－2300m辺りである。公園は、森林、草原、岩場等がそれぞれ３分の１を占めている。植生はかつて人為の影響を受け、ほとんど二次的な植生であるが、国立公園に指定されてからは厳しい規制を受けていて、自然の復元がはかられている。もちろん放牧も禁止されている。

現存植生は亜高山帯下部はドイツトウヒ、上部はオウシュウカラマツが優占している森林であるが、復元途上の森林でまだ疎林の部分が多い。ところどころ草地がみられるが、かつて放牧地に利用されていたためである。一部岩の多い所などは、センブラマツ林が発達している。高山帯付近は、低木性のムゴマツがブッシュとなっていたり、草地が広がっている。

公園創立当時は、野生動物もほとんど姿がなかったが、アカシカ、アイベックスが移入されて、現在はあちこちに見られるようになった。シャモア、多数のマーモット、リス、キツネなどは在来のものがみられ、生息している哺乳動物は30種といわれ、これらはほとんど個体数が確認されている。野鳥では、イヌワシ、オオライチョウ、ホシガラスなど100種類以上がみられる。肉食哺乳動物は絶滅したが、草食動物の採食によって、高山帯は草地が保たれている。また森林の林床も草地状となっているのがみられた。

公園の保護と利用：公園は常に公園科学委員会や内外の研究者によって調査、研究が行なわれており、その成果は公園管理や、保護策に還元されている。また訪問者のための観察資料を提供している。またスイス自然保護協会では公園の自然を守るためにさまざまな普

写真１．スイス国立公園のビジターセンター「国立公園の家」。

及活動をしている。

公園の管理は国立公園委員会による。委員は9名で、政府、自治体、自然保護協会、科学研究協会から任命されたものである。狭い国立公園にもかかわらず、10ケ所の事務所があり、いろいろなサービスを行なっている。ツエルネッツには、[国立公園の家]と名づけられたビジターセンターがあり(写真1)、公園案内や展示物、出版物他の販売、ビデオ上映、講義などを行なっている。展示物、映像はヨーロッパ各国の訪問者にサービスするため、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語(地方語)で表示され、生物名はさらに学名が付加するという徹底ぶりである(写真2)。出版物、パンフレットも数ケ国語(図2)で出版されている。その他、訪問記念にバッジ、ワッペン、メダルなどが販売されていた。各種地図も取りそろえてある。

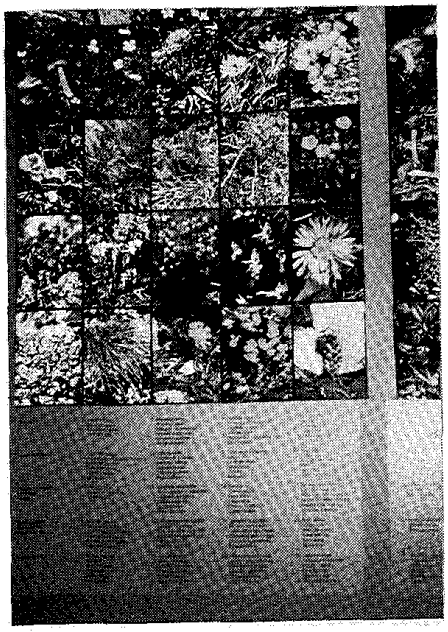

写真2．センターの展示室の植物写真。種名は学名、図のほか5ヶ国語で示されている。

DER SCHWEIZERISCHE NATIONALPARK

IL PARCO NAZIONALE SVIZZERO
IL PARC NAZIUNAL SVIZZER

LE PARC NATIONAL SUISSE
THE SWISS NATIONAL PARK

図2．スイス国立公園の5ヶ国語で書かれたガイドブックの表紙。

国立公園の訪問者は、国道に沿った、数ケ所の入口の駐車場に車をおいて、定められたいくつかのルートに沿って歩くことになる。ルートは6つあり、時間、対象、体力に応じて設定されている。必要があればガイドがついてくれる。我々は、野生動物観察コース(5時間コース、写真3)をガイド付で歩いたが、ちょうど景観的に上高地のようで、緩やかな清流があり、その上流にはアルプスが聳えていた。女性のガイドは当然ながら動植物、地質に詳しいが、筆者がいろいろな植物の名を尋ねると、全て学名で教えてくれた。森の中では、繁殖期なのでアカジカが盛んに啼いていた。森をぬけ、標高2000mの草地に出ると、各所でマーモットが巣穴から姿を出して、愛敬を振りまいている。対岸の急斜面では、アイベックスの群れが草を食んでいた。あちこちに座って望遠鏡をのぞいている人に出会ったが、ガイドによると一日中、同じ場所で動物を観察している人達であるという(写真4)。植生的には復元された自然ではあるが、こんなに身近に野生動物が沢山見られるのは、サルを除いては日本では少ないであろう。スイス国立公園は、全地域が厳正保護地域

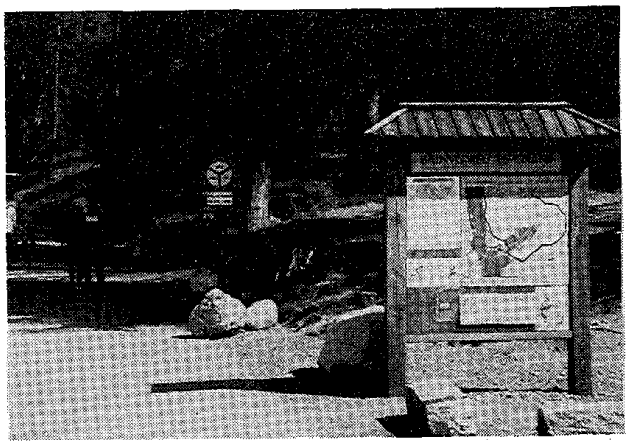

写真3．スイス国立公園の野生動物観察コースの入口。

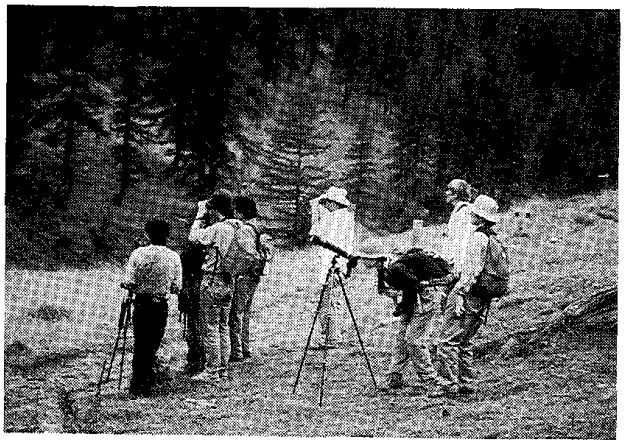

写真4．スイス国立公園では、アニマルウオッチングが人気がある。

であるので、入口から心構えが必要である。そのように厳重に保護されているという、大自然への大きな期待に胸を膨らませて入場するが、期待にたがわず、野生の自然を満喫できた。しかし一方で、あまりの厳しさに、窮屈な感じもする。一般の人々にとっては、規制に対して圧迫感を感じるだろうし、園内で自由にのびのび振る舞うことは出来ない。野生動物の声を聞いている人のためにわいわい大声も出せない。もちろん子供達もあちこちを遊び回ったり、草花を摘むことも許されない。ごみ箱や観光施設、トイレもない。このような自然公園に接する形態は、ヨーロッパの人々にとって当たり前のモラルとして受け入れられているのであろう。実際、歩道沿いには、立ち入り禁止の柵もロープもなかったし、そのために歩道沿いの草地がとくに荒廃しているという様子もほとんどなかった。国立公園の趣旨が徹底しているとはいうものの、ある面では物足りない感じもする。スイス国立公園の成立の歴史が、あくまで原始的自然を確保する、その復元をはかるということで、土地の拡大があったため、現状のようになっているのであるが、余裕があるならば、他の国の国立公園のように、バッファーゾーンのような、ある程度訪問者が質は高くなくとも、容易に自然に親しむことができ、またある程度の施設があって、いわゆる観光的な接し方ができるような地域が設定されてもいいのではないか。その地域は、原生的な自然を保護するバッファーゾーンにもなる。すなわち二段がまえの公園利用ということになる。この二重ゲートによって、厳正的自然地域の保護もさらにはかられるであろう。と一方では羨ましく思いながら、他方ではスイス国立公園形式は、現状では日本では不可能であろうと考えた。

2．ホーエ・タウエルン国立公園

概要：オーストリアアルプスの西方、チロル州、ケルンテン州、ザルツブルグ州の3州にまたがるホーエ・タウエルン国立公園は、総面積66500haの広大な山岳公園である。そのうち約30000haが私有地で、残りは公有地と団体所有地である。

当地を国立公園にしようとした動きは、1900年代当初からあったが、実際は1950年頃より運動が高まり、自然保護団体が土地購入を拡大しながら進んできた。1971年には、3州の知事が「東アルプスのとくに優れた自然地域、景観と、原始状態を未来のために保護する」ために、国立公園制定の合意が成立した。もともと当地域は、多くが私有地で、人々も生活していたり、林業、放牧も行なわれていたために、広大な地域を国立公園として指定するには、営造物制でなく、地域制の国立公園とすることとし、地元等の利害を調整することに時間が費やされた。また、オーストリアは連邦制であり、各州の自治が強いので、3州同じ法律のもとで制定はできず、1984年ザルツブルグ州は州国立公園法を作って、自州の地域に適用する独自の国立公園管理を行なっている。

この国立公園は標高1000mから最高峰グロスグロックナー山（3798m）にわたる山岳公園で、多数の渓谷、湖、氷河を含んでいる。観光的に有名な、ヨーロッパ最大といわれるクリンムル滝、世界で最も美しい景観を有するグロスグロックナー山岳道路とパスターツェ氷河、ロープウエイで簡単に行けるワイスジーの氷河湖と氷河景観などがある。3000m級の山は160座もあるという。麓の町から車道、ロープウエイなどで上っていくと、標高1900m辺りまでは植林または復元されたトウヒやカラマツの森林や放牧地が広がる。それ以高はムゴマツの低木群落、高山草地となり氷河や岩地と交じる。野生動物は各種の哺乳動物、鳥類などアルプス共通種が生息しているが、アイベックス、特殊なワシ類などが移入されている。

公園の保護と利用：当公園で特徴的なことは、地域制の公園であることから、地域区分がなされていることである。すなわち、周辺地域、核心地域、特別保護区の3区分である。周辺地域は、約23000haで、全体の3分の1、地元住民が生活しており、自然と人文的環境の調和された美しい地域である。この地域はスキー場、リフト、キャンプ、車道など一定の開発や土地利用は、法的に制限されている。一方でこのような景観を長年にわたって培ってきた、現地の山岳農牧民の同意と協力が必要であり、彼らの生活に相当の考慮が払われて

いる。

核心地域（コアエリア）は43000haと広く、基本的に原生地域が指定されているほか、復元地域も含まれている。この地域はほとんど一切の開発行為や自然破壊は禁止され、自然のなすがままにまかされている地域である。特別保護区は、上記の両者の中で、特別に保護されるべき地域を設定して、より徹底した保護がはかられている。その広さは場所によって13haから4000haとなっている。現在核心地域のうち20000haを特別保護区に編入する計画がある。

麓の町の各所には国立公園コミュニテイと呼ぶビジターセンターがあり、訪問者のインフォーメイションサービスを行っている。ノイキルヘンの町には公園管理事務所がある。ここには管理官やガイドがいて、希望に応じて各地を案内してくれる。以下、ガイドを伴ったクリンムル滝地区、グロスグロックナー地区、ワイスジー地区などを訪問したときの様子を紹介する。

クリンムル滝：国道から遠望できるが、一帯は観光地区となっている。入り口には大きな駐車場や土産物屋がいくつかあり、多くの観光客で賑わっていた。日本の典型的な観光地と同じ光景である（写真５）。ただ気がついたことは、ごみ箱や飲み物の自動販売機がない。もちろんごみの散乱は見られなかった。ただ空き缶のごみ箱が少し目についた（写真６）。これは観光客が持参する飲料の空き缶捨て用である。このごみ箱は特殊な仕掛けがしてある。ふたを開けてカンを入れ、ふたを閉めると自動的にカンがつぶれる仕組みになっている。後でごみ処理が楽になる。なぜカン飲料を持参する観光客がいるのか後で分かった。入り口では100円の入園料をとられたが、日本の国立公園では考えられない。滝の途中に展望台があって、そこまで約40分ほどかなり急な山道を歩くことになる。観光客は汗を流しながら狭い道をひしめきあって登っている。滝自体は日本ではいくらでもあるようなものであったが、下ってくるとかなりのどが渇いた。そのために観光客の中にはカン飲料を持ってきている人がいるのであろう。ただ途中には空き缶ごみ箱は一つもなかった。

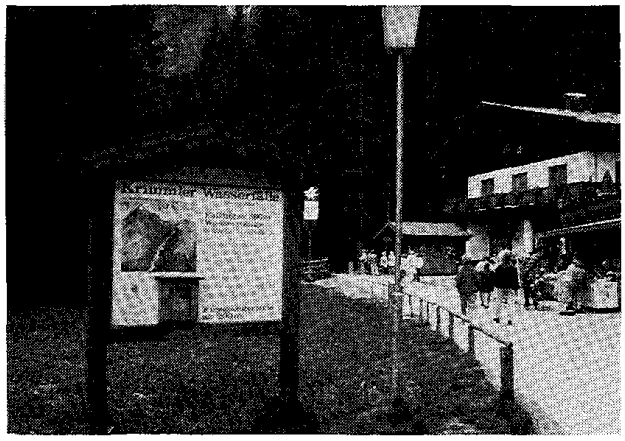

写真５．ホーエ・タウエルン国立公園のクリンムル滝の入口。オーストリア山岳会が管理している。

写真６．クリンムル滝の空き缶をつぶして入れるごみ袋。

グロスグロックナー地区：麓のツエルアムジーの町はずれに、山岳道路の入口がある。訪問当日は晴天で、かなりの車で賑わっていた。しかし観光バスは別のゲートからほとんど待たずに有料道路に乗れた。しばらくするとアルプスの山岳が目の前に大パノラマを繰り広げる。氷河が白銀に光り、緑の草原が山肌を彩る。たしかに世界一のすばらしい景観であった（写真７）。くねくねと回りながら終点の駐車場に着くと、ここも多数のバスや車で満車状態であった。まったく日本の車観光地と変わらない。しかしグロスグロックナー山の雄姿と、パスターツエ氷河の雄大な景観に圧倒されてしまった。氷河のほとりに沿って歩道が続いているが、その辺りに多数のマーモットがいて、観光客の人気の的であった。この歩道はさらに上流に向かっている。約40分ほど早足で歩いていくと、真向かいに黒いグロスグロックナー山が近づくが、この辺りはピカフールという特別保護区となっていた。ここはヨーロッパで有名な貴重植物の自生地であるという。もちろん一帯は高山植物群落となっている。アルプスの名花、エーデルワイスも咲いているということである。筆者も目を凝らして探してみたがそのかけらもなかった。

今回筆者が訪問したヨーロッパアルプスの中で、最も観光客で溢れていた地区であるが、自然が荒廃しているといった感じは受けなかった。むしろマス観光地としてはうまくいっている地域であろう。そのように感じた理由は、観光客のモラルが高いためではないかと思われる。最高級の自然景観を他の多くの人にも素晴らしいままで見せて（残して）やりたいという気持ちが伝わってくるようであった。なお駐車場入口では空き場所を待つ車が続いていたが、これは現地の過剰利用や許容量の対策となっている。入口と終点である程度入園制限がなされていることになる。

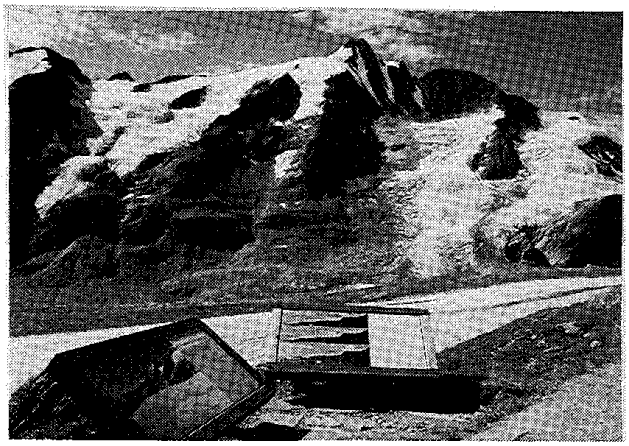

写真７．オーストリアアルプスの最高峰グロスゴロックナー山とパスッターツェ氷河。

ワイスジー地区：ウッテンドルフの町から谷沿いにかなり上っていくと、ロープウエイの駅に着く。ここで車を降りてロープウェイに乗り換える。かなりの急斜面を上ると、眼下は荒涼とした高山岩礫地となる。ムゴマツがハイマツのように岩はだにへばりついている。所々、小さな湖が見える。前方にモレーンの岩山が迫ってくる。やがて目前に青白色の氷河湖と、白い氷河が広がった標高2300mの終点に着く。ここにはオーストリア山岳会所有の山小屋であるルドルフスヒュッテがあった。周辺の湖は発電用のダム湖となっていた（写真８）。

ヒュッテはかなり立派な山小屋で収容人員は250名である。ここは登山スポーツのトレーニングセンターで、岩登りやフリークライミングのゲレンデやルームがあり、インストラクターがいて指導してくれる。部屋は２、４人部屋で、宿泊費は２食付き2000円程度と安い。会員は割引となる。もっともすべてセルフサービスである。年間の宿泊客は２万5000人程度である。収益はオーストリア山岳会のものとなる。小屋の周辺は、工事の跡や登山者や観光客の踏みつけで裸地が広がっていたが、３分の１ほどは植生復元中であった。復元植物はすべてイネ科であったが、かなりよく成育していた。また周辺の草地には、夏の名残りの高山植物の花がいろいろ咲いていた。このヒュッテには、地元のザルツブルグ大学の高山研究所が同居してた。地質、生態学、気象学、高所医学などの研究室があった。たまたま地質学のスルペッツキー教授がいたので、氷河の変遷について話してもらったが、気象の観測は1979年から始めており、最近気温が１－２度上昇して大幅な氷河の後退が始まっているという。測候所はオーストリアで第２位の高さであるという。研究所の仕事は研究活動もさりながら、学生などの自然研修の教育、指導に主眼が置かれているという。小さいながら設備も整い大変うらやましい施設であった。

オーストリア山岳会：ルドルフスヒュッテでは、オー

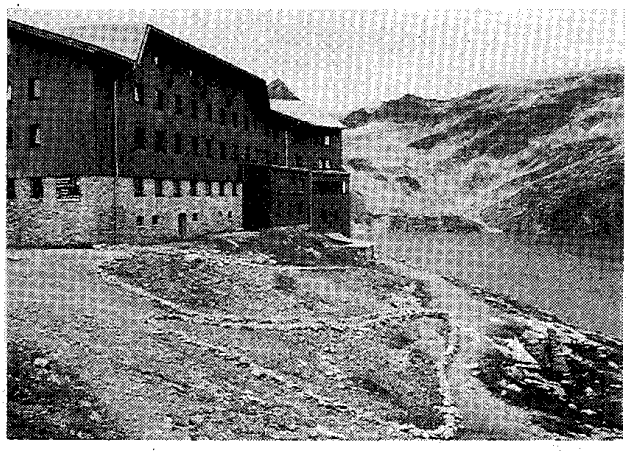

写真８．ホーエ・タウエルン国立公園内のルドルフヒュッテ。氷河と氷河湖が目前にあり、空き地は植生復元がなされている。

ストリア山岳会所属のエム博士に山小屋の排水処理について講義をしてもらった。エム博士は山岳会研究部に属し、高所の排水処理の専門家である。博士は自ら汚水処理装置を開発し、このヒュッテのみならず、各地の山小屋に設置している。オーストリアアルプスの山小屋の排出基準は、ＴＯＣ：75mg／l，BSB：20mg／l，NH_4：10mg／l である。ヨーロッパ最大の観光地オーストリアアルプスには約1000軒の山小屋があるという。このため水源地や上流の水質汚染は下流にとっては重要問題である。そのため汚染防止のため山小屋では汚水処理が義務づけられている。その処理法や規模はさまざまであるが、ここでは活性汚泥法で処理をしており、その建設費用は3000万円であったという。ここは氷河湖のダムで発電していて、その電気で建物を暖房したり、汚水処理装置の暖房に利用している。その点他の山小屋より有利である。オーストリア山岳会が中心となって、アルプスの山小屋の排水処理

法の研究が進んでおり、もはや従来の土壌浸透法は禁止されている。山岳会では各山小屋の排水処理の指導と監督権を持っている。それのみならず山小屋の新規開設、増改築の許可権限もある。それはオーストリア山岳会の伝統と自然保護、環境保全の実績、また会員数20万人の実力であろう。山岳会は国立公園の中にさまざまな事業を運営している。先のクリンムル滝の管理もその一つで、入園料の徴収、出版、ガイド、研修、自然保護の普及活動など多岐に渡る。政府も自分手の届きにくい部分を民間に委譲して、空白部分を補っている。またその付託に応えるだけの実力と熱意を山岳会は持っている。山岳会の入会条件は、山を愛し、自然保護に務めることだけである。山に登ることを主とする多くの日本の山岳会とは異なるようだ。彼らは登山、研究、学習、そして普及とその活動力に驚くが、その原点にアルプスの自然を愛するオーストリア人の誇りを感じる。

写真９．バイエリッシャー・ワルト国立公園の入口。シンボルマークは、針葉樹と広葉樹を示す。

３．バイエリッシャー・ワルト国立公園

概要：この国立公園は、かつての西ドイツの東南端、チェコスロバキアの国境に接している。この名前は文字通り、バイエルンの森であり、バイエルン州の一角にある。公園入口は、ミュンヘンの東北140kmのスピエゲラウかノイシェナウの町である。当地域は、標高700－1400m前後の山地にあり、森林の少ない西ドイツでは有数の森林地帯である（写真９）。公園の面積は13100haで、それほど広くないが、西ドイツ最初で最大の国立公園である。現在ドイツには４ケ所の国立公園しかないが、将来８ケ所になる計画があるという。ドイツは人口密度が高く、平地や丘陵地が多いことから、昔から自然に人手が加わり、原生林などはほとんど失われてしまった。ドイツ連邦政府は、優れた自然景観の保全をはかるために、国立の自然公園の制定をはかり、1969年にバイエリッシャー・ワルト国立公園が最初に制定された。当地は、もともと林業地域であり、林業は150年間行なわれていた。すなわち当地域は、かなり森林が豊かであったことを示している。ただ原生林といえるものは、切り残された一部の急斜面にしか残存していない。現在、国立公園の98％が森林地帯となっている。国立公園指定にあたっては、従来の林業や、狩猟、観光との対立があった。彼らを説得するために地元の自治体が調整を行ない、種々の条件付けのもとに、国立公園として発足したのである。そのような経過から、当国立公園も地域制の国立公園となっている。

当地はほとんど森林に覆われているが、標高1100m辺りまではシロモミ、カエデ、ブナなどの混交林で、1100－1400m辺りは、トウヒ林となっている。谷のくぼ地にはトウヒ林が下降している。森林は現在基本的に伐採が禁止され、自然の復元がはかられている。したがって現存している森林は、大部分復元途上の森林である。公園管理官にもっとも自然らしいブナ林を案内してもらったが、胸高直径は最大で50cm程度であった。なお一部林業地域が含まれているが、これらも天然更新施業と択伐が原則で、伐期は150年と気が遠くなるような長さであった。

全体が森林地帯なので、大形の草食動物の数は少ない。かつて多く生息していたオオヤマネコ、クマ、バイソンは特別保護区で保護されている。野鳥の類は豊富で、ワシ・タカ類やキツツキの仲間も増えてきている。園内には野生動物園があって、餌をやらないで自然のままに生きている動物を観察できる。ただし双眼鏡必携である。

公園の保護と利用：当地は昔から林業地、狩猟地、観光地として知られてきた。すでにかなりの利用地を含む地域を、自然保護をはかるために国立公園に指定するには、地域制の公園とせざるをえない。国立公園に指定することにより、利用が規制されることに、地元では反発が高かった。地元との調整の結果、約３分の１の5500haが核心地域として厳正保護区とされ、あとは規制の中で人間の諸活動の許された周辺地域とされた。しかし国立公園に指定されたことがかえって観光的効果を招き、年間の訪問者は150万人にもなって、地元の生活を支えることになった。周辺地域には、循環車道があり、各所に小型の駐車場がある。また歩道、ハイキング道、登山道が張り巡らされている。その沿道には、野生動物観察地、休息地、遊び場、キャンプ

地、その他の自然観察地などがある。

ノイシェナウ地区には、ビジターセンターを兼ねた国立公園管理事務所がある。駐車場はバスやマイカーで混んでいたし、訪問者も多かった。この地区は一種のミニ公園で、短時間で自然を楽しむコースとビジターセンターがある。森林浴を求めて、最も人気の高い場所でもある。

ビジターセンターは、かなり大きな建物で、一階はインフォーメイション・カウンター、売店、展示室、2階には事務所、研修室などがあった。別棟には標本作成室（写真10）や工作室があり、一般の訪問者も見学可能であるし、実習も出来るようにサービスされている。野外は植物園となっており、コースにそって、公園に自生している植物が観察できる。売店には観光的な土産物は一切なく、各種ガイドブック、地図、記念品、いわゆる自然保護グッズなどが豊富で、筆者等も山のように買いこんだ。一角に販売用の鉢植えの植物が数種類あったが、これは当地の貴重植物であるという。一瞬とまどったが、これらは植物園で栽培されたものであった。販売の理由を聞くと、公園内の貴重種を盗掘されないよう、ここで欲しい人に分けているのだという。センターの入場者は年間30万人で、ガイドによる案内は3万人である。ガイドは現在14名であるが、20名にふやして、9万人規模のガイドをしたいとのことである。バイエルン州からくる予算は、年間約9億円であるが、そのうち80％は職員（140名うち40名専任）の給料になってしまい、公園の維持・管理や教育活動、施設の充実に回る額が少ないという。

管理局長のハンス＝キーナン氏に、もっとも自然らしいブナ林を案内してもらったが、標高約1000m地点なので、ブナとトウヒとマツが混じっていた。原生林ではなく、林床は貧弱で見通しのきく森林であった（写真11）。日本の森林と比べると、構成種も少なく、植林地のようで貧弱であった。

全体として、当公園は規模が小さいこともあるが、スタッフも充実し、よく整備された公園である。自然に親しんだり、観察するために手ごろな公園といえる。この公園の目的はいくつかあるが、まず自然保護をはかることである。ここで自然保護というのは、自然のプロセスを保護するという考えである。すなわち自然の営為にまかすということで、ここに生育・生息している生物を自然現象のなすがままに放置しておく。一切の手助けはしないということである。生態系の保全ということになる。またこれらの自然は、度量衡のようなもので、あらゆる現象の基準となるものである。人間が手を加えてしまった自然をはかる物差しである。その比較探究によって、構造の変化、発展を明らかにし、健全な姿を保持するための施策を知ることが出来る。またこれらの自然に接することによって、深い感動を味わい、自然の微妙さを知ることにより自然保護の大切さを学ぶことが出来る。そういう意味で、当公園は核心地域で厳正保護をはかるが、周辺地域では自然と人々との触れ合いをはかる。それは一種の観光であるが、これによって地元の収入につながり、地元の人が公園管理で職を得ることが出来ることによって、地元でも公園の維持、管理、発展や、規制に協力してもらえるのであるというのが、この国立公園のコンセプトである。

写真10．ビジターセンターの売店。公園に関する豊富な資料、図鑑、地図、物品等が売られている。

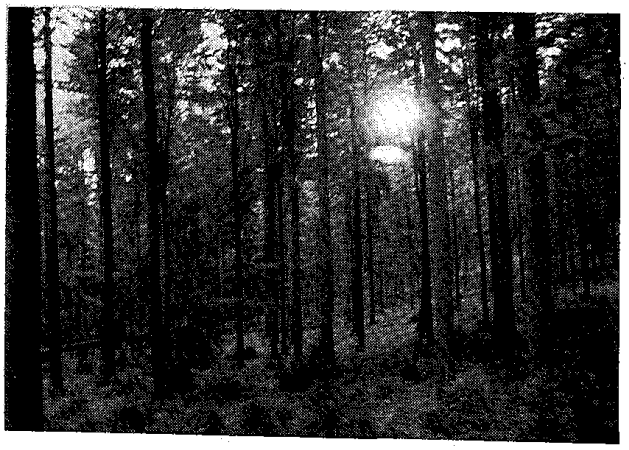

写真11．バイエルンの森のブナ林。林床の植生は貧弱である。

まとめ

以上、ヨーロッパアルプスおよびドイツの山岳国立公園を見てきたが、それぞれの地域は、国情、歴史、社会的条件、自然の残存性などによって、さまざまな形態やコンセプトがある。どの形態が好ましいかは一概には言えない。ただ共通していることは、かつて多くあった原始的自然を失ってしまったことを、非常に悔やんでいること、何とかしてその自然を取り戻したいという望みが強いことである。またそれらは、1900年代当初から始まった、自然保護運動や野外自然科学の発展による自然観に支えられている。実際現在相当数の国民が、自然保護団体の会員となっていることは、一応経済的には豊かさを得るようになったヨーロッパの人々にとって、もう一つの豊かさを自然の中に求めて来ているという現れである。しかしすでにヨーロッパの自然は失われていた。わずか残った自然を核として、また自然を創造していこうという実験を始めているのである。現代文明が先行しているヨーロッパの現象は、近い内に日本にも訪れるであろう。幸いなことにまだ日本では自然が残っている。この自然を保全していくことは、将来に大きな遺産を残していくことになるであろう。

参考文献

Briand, F., Dubost, M., Pitt, D. & Rambaud, D. : The Alps-a system under pressure. ICUN, Geneva, 1989
Hans Bibelriether : Barvarian Forest National Park, Morsak, Grafenau. 1987.
Willi und Ursula Dolder : Der Schweizeriche Nationalpark. Kilda-Verlag, Greven. 1979.
他いくつかのパンフレット、資料による。